

神道の信仰心の心理的分析 —神の捉え方を心理学的に説明できるか—

安藤 則夫^[1] 植草学園大学発達教育学部

Psychological considerations of Shintoistic worship —Can we Explain the Concepts of Gods Psychologically?—

Norio ANDO Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

日本人の心理的特性である「敏感さ」から、日本人の精神的基盤の一つと考えられる神道の特徴を分析した。基本的には、「敏感さ」ゆえに、様々な身近な現象に対して霊性や神性を感じる。そのために多くの神性を感じる多神教的性質が現れたり、生命力を感じるといったアニミズム的な感じ方になると考えられる。また、自然に感じる事が主になり、意識的な信念の必要性を感じないために、無宗教的態度が現れる。抽象的な概念よりも、現世利益を追求するといった世俗的感じ方を重視する信仰も生まれた。不幸な死を遂げた者への恐れや感情から、怨霊思想が生まれ、先祖との感情的結び付きから、祖霊崇拝が生まれた。敏感さゆえに状況の変化に応じ霊性の感じ方も変わり、新しい神を生みだすことになったと考えられる。現実には感じられない神を努力して信じる一神教と違い、抽象的な展望を含まない世俗的感じ方に基づく神への信仰が日本人の宗教的態度の特徴と考えられた。

キーワード：神道の信仰、心理的分析、敏感さ、世俗的感情

The features of Shinto, thought to be one of the spiritual bases of the Japanese mentality, are analyzed on the basis of “high sensitivity” (HS) a psychological characteristic of Japanese people. Basically, due to this HS, people feel many signs of spirits or gods in the natural phenomena around them, and this leads to polytheism and animistic worship.

Also as HS provides people with abundant spiritual feelings, and no conscious belief in abstract existence is necessary for them, they have a tendency to adapt atheistic attitudes and make secular demands for benefits in the world. Because of HS, people feel fear of revengeful spirits which are caused by unfortunate deaths, and try to comfort them through worship. People feel emotional ties with the spirits of ancestors, worshipping them as well.

Different from monotheists who effortfully believe in God with little sign in this world, Japanese people base their concepts of gods on worldly feelings to nature and daily life, which does not enable them to have abstract ways of belief. This is thought to be a characteristic of Japanese people toward faith.

Keywords: Shinto, Worship of Gods, Psychological Analysis, High Sensitivity, Worldly Feeling

[1] 著者連絡先：安藤則夫

1. はじめに

1.1 生き続ける神道

日本人の精神的基盤の一つと考えられる神道は、不思議な面を持っている。佐伯¹⁾は、仏教や儒教など高度な宗教や思想の流入にもかかわらず、地方宗教に過ぎない神道が連綿と生き延びてきたこと、しかも、さしたる抵抗も示さず他の宗教と共存してしまっていることに驚きを示している。江戸時代末期から明治時代中期まで在日イギリス公使館で働いていたAston²⁾は、神道を未発達な宗教であると述べているが、高度に文明が発展している日本において、このような宗教が、現在まで生き続けていることも不思議ではある。ただAstonは、神道は未発達ではあるが、組織化された神官階級や整った祭儀が存在する点から見て、原始宗教ではないと述べている。思想的には未発達だが形式的には整っているというわけである。未発達な面と進んだ面が混在している点については、説明が必要である。

形式の点で言うならば、平野³⁾は、神の祀り方が古代からほとんど変わることがないと指摘している。もちろん、神道は政治情勢や流行りの思想の影響を受けて変化してきた面はある。7世紀頃には、朝廷支配の権威づけに利用されたり、平安時代には仏教に影響されて両部神道ができたり、本地垂迹説が現れたりした。江戸時代には、儒教の影響を受けた神道が唱えられた⁴⁾。しかし、神に対する信仰のあり方は、変化してこなかった。例えば、儀式的側面はそれほど変化していない。日本の神道には、何か特異な面が存在するのである。

1.2 日本人の神の受けとめ方

神道を擁する日本人の神道の信仰の仕方も特異である。日本人の多くは、自身のことを無宗教だと考えている。神主の中にも、神の存在を信じていない人がいるという⁵⁾。外国で宗教を聞かれると、仏教のことを知らないのに、とりあえず仏教徒と答える。神社に参拝しても、神社に関する知識がない。このように、それほど信仰されていない神道が、長い間連綿と生き延びてきたのである。

高度に発達した仏教が導入されても、西洋のよう

な宗教戦争を起こすことなく、神道は仏教と共存したり、融合して生き続けている。むしろ仏教の方が葬式といった祖霊崇拝を取り込んで日本的なものに変化している。キリスト教のような高度に発達した宗教も、日本ではそれほど広まっていない。このことから日本人は「本人も意識していないにもかかわらず、矢でも鉄砲でも動じないような宗教的感覚をしっかりと持っているということさえできる」と梶村⁶⁾は述べている。

1.3 日本人の心理的特性と神道の信仰

神道や日本人の宗教心の特異性は、日本的心性を反映している。その点をしっかりと理解する必要がある。日本人の心理的特性をしっかりと踏まえた形で信仰心への理解が深まることで、未発達と言われる神道がそのまま生き続けるわけがよく理解できるようになるし、無宗教と思われながらも失われない日本人の宗教心の意味が解明できるであろう。西洋的な尺度ではとらえることができない日本の独自性も理解されるようになるだろう。

そのような独自性に日本人自身も気づいていないためと西洋を崇拝する気持ちから、西洋の宗教観を正統なものにとらえ、自分達の宗教心を卑下したり、非科学的に日本の宗教を擁護したりすることになる。例えば、日本人には、真剣に宗教活動に取り組む人が少なく宗教意識が弱いとか、神様にお祈りしたり、仏様に祈ったり、クリスマスを祝ったりするように宗教的に節操がないといった否定的な見方になったり、日本は神国であると誇大な見方になる。

神道の信仰心を、心理的特性の面から心理的に考察することで、もっと明確に神道の信仰の特性が理解出来るものと考えられる。そこで、本論では、日本人の心理的特性から、特に神道に含まれると考えられる神々への日本人の態度について、心理学的に考察したいと考えている。

2. 目的

2.1 心理的特性から神道の信仰心を見る

本論の目的は、日本人の信仰心、特に神道における神の捉え方について、日本人の心理的特性から心

理的に分析し、神道の信仰心の根拠を明確に示すことである。そうすることで、一見、曖昧で無節操と考えられている日本人の宗教心や宗教的行動の意味が理解できるのである。さらに、このことを通じて、様々な宗教の比較が、論理や行動の面からだけでなく、心理的特性の面からも行える可能性を示したい。

3. 方法

3.1 日本人の心理的特性

本論では、日本人の心理的特性に基づいて、神道における信仰の特徴や特異性を心理的に分析する。

まず、日本人の心理的特性については、様々な意見があるのだが、できるだけ根本的な特性を選択して、分析する。根本的な特性を選択することで、多岐にわたる宗教的現象が一元的に把握されるようになる。

さて、本論では根本的な心理的特性を、「敏感さ」と考えた。「敏感さ」を日本人の根本的な心理的特性と考えたのは、南⁷⁾である。彼は、明治から現代に至るまでに現れた「日本人論」を網羅的に調べ、彼なりに日本人の基本的な国民性についての結論を得た。それが「敏感さ」である。

著者自身、日本人の文化や行動特性、言語的特質を考える場合に、「敏感さ」を基礎として分析することが有効であると感じている⁸⁾。信仰心の分析においても、有効ではないかと予想される。

3.2 考察の対象

これから考察するのは、日本の神道における神々の考え方や信仰の仕方についてである。特に日本人の国民性という点から、神々に対する信仰心について考察したいので、できるだけ庶民レベルに見られる信仰を考察の対象とする。

しかし、日本の神道として考えられる対象には、天皇家に関わる神道（神話や祭祀）が含まれている。むしろ、天皇家に関わる神道を中心にすえて考える人もいる⁹⁾。本居宣長や平田篤胤といった国学者たちも、そう考える人達である。ただ本論では、庶民の信仰に焦点を当てるために、天皇家に関わる部分については、考察しないことにする。

例えば、古事記や日本書紀に書かれた神話につい

ては、考察しない。津田¹⁰⁾も主張するように「神代の物語は、それを全体として見れば、政治的統治者の権威の由来を説いた物語である」。いわゆる記紀神話は、皇室の権威を高めるという政治思想の表れなのである¹¹⁾。

記紀に書かれている日本神話は、古くからある説話をそのまま集録したものではなく、記紀が書かれる頃に新たに編集されたものである。

日本神話において最高神と考えられているアマテラス（天照）は、天皇家が古くから信仰していた神ではなく、もともと伊勢地方で信仰されていた神であり、持統天皇の時代に天皇家の神話の中に組み込まれたものと考えられている¹²⁾。

また、イザナギ（伊邪那岐）・イザナミ（伊邪那美）の国生み神話も、もともとは淡路島付近の海人の風土的な創造神話であると言われている¹³⁾。

スサノオ（須佐之男）やオオクニヌシ（大国主）の物語も、出雲などの地方の話を取り入れたものである。このように、日本神話は、各地の説話を集めて作られた。

さらに記紀の神話には政治的意図が込められている。例えば、アマテラスの孫であるニニギ（邇邇芸）が高千穂に「天孫降臨」して国造りを始めるという話がある。これには、持統天皇（祖母）から文武天皇（孫）への継承を示しているという説¹¹⁾と元明天皇（祖母）から聖武天皇（孫）への継承を示しているという説¹²⁾がある。いずれにしても、それまで慣行となっていた兄弟相承と異なる父から子への直系の皇位継承を正当化するために創作されたと考えられている¹¹⁾¹²⁾。

さらに明治になってからのいわゆる国家神道は、やはり天皇の権威を高めて国民の統制に役立てるために意図して作られた体制であるので、今回の考察から省く。

また、神道には、様々な思想的に異なる流派がある。理論化された神道と言ってもよいであろう。理論化としては、本地垂迹説やそれに対抗する神本仏迹説がある。それらに関わって伊勢神道や両部神道、吉田神道などが生まれてきた⁹⁾。このような思想的流派は、仏教の宗派とは違い、庶民レベルの信仰にはそれほど影響を与えているとは思われないので、

考察しないことにする。

したがって対象と考えるのは、思想や政治に関わらない民間の信仰とそこで見られる神々との関わりである。日本の古来からある神道が考察の中心となる。一般的に言われている神道が、七世紀後半の天武朝ごろに確立されたという意見もあるので、それ以前からの信仰も含めることになる。

3.3 神道的信仰の特徴

次に考察の対象とする神道的信仰の特徴について考えてみよう。Astonの「神道」の訳者である安田¹⁴⁾によれば、Astonが考える日本の神道の特徴は、①多神教的なこと、②最高（至上）神が存在しないこと、③像や道徳律がないこと、④霊の概念的把握や霊の人格化がないこと、⑤来世の状態、つまり死後の状態の認識がないこと、⑥深く熱烈な信仰がないことである¹⁴⁾。

多神教（①②があてはまる）であることが神道の特徴であることは異論がないであろう。多神教と関連して言われるのは、アニミズム的靈魂観¹⁵⁾なので、自然物に生命力は感じてそれほど人格化して捉えない日本的アニミズム（④があてはまる）についても考察したい。また、無宗教的態度や他宗教の神も拝むという信仰（⑥があてはまる）の仕方がある。それらと似ているのは、道徳的なことよりも現世利益を求める傾向（③があてはまる）である。祖霊信仰（④⑤があてはまる）も日本人独特の信仰の表れと言われている。それと関連しているのは、怨霊思想（⑤があてはまる）である。さらに多神教を支える新しい神を作り出すという現象（①②があてはまる）も信仰の特徴と考えられる。これらの信仰の特徴を分析することで、神道的信仰の特異性の意味を解明する。

4. 神道的信仰の分析

4.1 多神教

日本の神道を考える上で重要なことは、神様が多いということである。Aston²⁾によると、「延喜式」に3132もの公的に認められた社が挙がっているという。その原因の一つとして、Astonは、神をその名前ではなく、土地の名前で呼ぶ習慣のせいである

という。彼は、「実際の日本人は、ある特別の場所に祀られている神がどういふ神なのか、ほとんど気にかけない。」と指摘している²⁾。

しかも、いくつもの名を持つ神がいるので、神の数を正確に把握するのは困難である。有名な例を挙げるならば、オオクニヌシである。彼には、オオナムヂノカミ（大穴牟遲神）、ヤチホコノカミ（八千矛神）など多くの異名がある。また、本来の皇祖神とも考えられているタカミムスビは、古事記では高御産巢日神、日本書紀では高皇産靈神と書かれ、タカギノカミ（高木神）とも呼ばれている。

また、Astonは、神道の発展期に、日本の中央政府が弱体であったことも多神教的性格を持つ原因の一つと考えている²⁾。そのおかげで地方の神々が活気と威信を持ったというのである。

ただこれらの指摘は、本質をついていないように思われる。なぜならば中央政府が強化された後にも、多神教的性格が続いたからである。この問題は、日本人の「敏感さ」から考えるべきである。敏感であることで、何かちょっとした変わったことや不思議なことに感動したり、何かの気配を偉大と感じやすくなる。そして自然の姿に偉大さを感じることで、神的存在を感じるようになる。

山折¹⁶⁾は、「旧約聖書やコーランの神は信ずる神だが、日本のカミは感ずるカミである」と述べている。また、久保田¹⁷⁾は、「そこに樹木があれば、神の降り立ち、神の鎮もりが『気配』として実感されるのである。神をこのように『気配』として感じる日本人の感性こそ、その自然観を宗教観に等しくさせている。」と述べている。自然の中に神の気配を感じる感性の根底には、敏感な感受性があると言っているであろう。

日本人は、理屈で考えなくても、十分に感じる。十分に感じることで満たされてしまう。それほど頭で考えたり、意志の力で信じる努力をしなくてもよいのである。そのことを端的に示しているのは、伊勢神宮を参拝したときに詠われた西行法師の和歌である¹⁸⁾。

なにごとのおわしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるる

神宮の中の神がどんな神かは知らないけれども、ありがたさを感じて涙がこぼれた、という意味であり、感動で心がいっぱいであり、知的な作業はいらないと解釈できる。

日本人は、敏感に感じることで、実に様々なものや自然現象に神を感じ、それらを神として祀っている。山や川、海、風、雷、高い木、火、さらに竈（かまど）や井戸にも神を感じるのである。つまり、日本人は至る所に神を感じていると言える。また様々な自然現象にも神性を感じている。例えば、草木が繁ること、稲が実ることに生命力を感じ、生命を生み出す力に神を感じるのである。このように敏感さによって多神教的傾向が説明できる。

4.2 アニミズム

Astonは、日本の神道は、アニミズムであると述べている。アニミズムとは、無生物を生物としてとらえることである。それには、単に生命力があると見るレベルから、生命力があって動物のように動いていると感じるレベル、さらに人間的な感情や考えを持っている存在として見るレベルがある。

そのようなレベルを神の概念の諸段階として考えたのはAstonである。彼の「神の概念の諸段階」は次の通りである。例えば、「太陽」をアニミズム的に見るとどうなるかが描かれている。

1. 太陽（月、風、海など）は生きている。
2. 太陽は男性、父、長、あるいは王である。最初は修辭的に、次いで文字通り、そう考えられる。
3. 太陽は、人間の形と情熱をもった、見えないが、実体がなくはない存在によって支配されている物体である。
4. 太陽は、(イ) 霊的な分身spiritual doubleをもっている神人同形的anthropomorphicな存在によって支配された物体か、それとも、(ロ) 霊的存在によって生気を与えられているもの、かのどちらかである。²⁾

Astonによれば、神道では、生命力を感じたり、霊性を感じたりしても、人格化は進んでいないという。神話の中の神も、それほど人間化されていないと述べている。アニミズム自体が原始的と言われて

いるが、アニミズムの段階としても低いレベルに留まっているという。

Astonはさらに「霊の概念把握が相対的に薄弱」²⁾、「物自体から明確に区別された神は存在しない」²⁾と指摘し、それらを原初的な宗教形態と考えた。また神道の最大の弱点は、確固とした倫理的要素の欠如であり、「良心」という語さえ神道語彙の中にない、と述べている。

周りの変化に感じやすい感性を持っている場合には、入道雲といった大きな変化だけでなく、小さな草花の成長や季節の移り変わり、雨や霧、風、山の存在などにも生命力を感じる。至るところにしかもいつも様々な生命力を感じる。

そういったことに敏感であり続ければ、大人になっても、時代を経て文化が進歩しても、いつまでもあらゆる場所に生命力を感じ、状況に影響を受け続けるので、アニミズムの段階に留まり続けても不思議ではない。

ただ、低いレベルに留まっているとか原始的であるという見方は、西欧中心的な見方のように思われる。一神教であるキリスト教が最高の宗教であるとする立場から「宗教は、こうあるべきだ」、だから「日本の宗教は原始的である」とか「日本の宗教心は、本物ではない」と評価を下しているのである。このような見方は、自己中心的な見方である。日本人の敏感さは、ひとつの特性であり、レベルが低いという問題ではない。

「アニミズム」という概念には、原始宗教という意味を含んでいる¹⁵⁾。だから、アニミズムというよりは、自然崇拝の宗教と呼んだ方がよいであろう。日本には、豊かな自然崇拝の宗教があると言える。自然崇拝の宗教を発展させてきたのである。

日本では、仏教やキリスト教を受け入れる能力は、あるけれども、敏感さによって、様々な自然の姿に霊性を感じ続けてきたと言える。神の人格化が進まなかったのは、敏感さによって霊性を感じるが多かったからと説明できる。

4.3 無宗教的態度

阿満⁵⁾によると、神道は、自然宗教であり、日本人に信仰心がないように見えるのは単に創唱宗教に

対する関心がないだけであるという。創唱宗教とは、特定の人物が特定の教義を唱えて、それを信じる人たちがいる宗教である。そのような創唱宗教を持っていないために、自然宗教を持っていても、自身を無宗教と考えてしまうと言うわけである。

創唱宗教だけが宗教であるといった西洋の宗教観に基づいて考える人は、日本の無宗教的態度を卑下する結果になりがちなのである。

感じる事が信仰の基礎となっている日本では、信仰するためにそれほど意識的な努力を必要としない。何か不思議な力を感じることで神を感じるわけだから、それほど考える必要がない。感じるところに従い、奉り、お願いし、畏れていけばいいわけである。かなり神秘さを感じれば、宗教心となり、それほど神秘さ感じなければ、繊細な感じ方となり、どこからが信仰心なのかが明確ではない。そのために、意識しないうちに宗教的行為を行っていたり、宗教的行為と言われても、それほど宗教的とは感じていないということが起こる。

つまり、日常生活の敏感な感じ方の中に、宗教的な感じ方が組み込まれているために、宗教心を持っているという明確な意識が生まれないのである。

4.4 現世利益のための信仰

神道は、現世利益を重視する宗教と言われる。人は悩みや願い事があると、神様をお願いしていた。「困ったときの神頼み」ということわざもあるほどである。江戸時代には、商売繁盛と金運をもたらす稲荷神が広まった。流行神と言われる神である⁴⁾。経済的に成功した人々が、さらに金儲けがうまくいくようにと、福の神としての稲荷を祀ることになったのである。

この傾向の明証は、金運神社と呼ばれる神社の存在である。正式名称ではないが、現世利益を求める精神の現れとして考えられる。有名な神社としては、富士吉田市の新屋山(あらややま)神社がある。ウェブの「一覧で見る日本全国の金運神社」¹⁹⁾の中では、全国で102の神社が金運神社として紹介され、京都の八坂神社もその中に入っている。

もともと、自然災害を恐れて霊性を感じる山や海などを信仰したり、稲の収穫を感謝したり豊作を願っ

て儀式・祭りが行われてきた。これらは害を避け、利益を求めるという意味では、現世利益的と言える。

Aston²⁾は、「神道の神への祈願は今日でさえ、大部分は物質的な幸福に対してである」や、神道の祝詞は「来世についてはどこにも述べていない」と述べている。世俗的な利益の方に関心が向いているために、「古代日本には道德律の宗教的拘束力はほとんどなかった」や、「『日本紀』では、盗み、強盗、謀叛、税金の不払いを非難しているが、(中略)どれも神道では正式に取り上げられていない」²⁾と述べている。

敏感さによって、状況から快不快を感じやすくなり、快や清浄さに関する関心が増した。その結果、現実の世界での快や清浄さ＝現世利益を求めることになった。また、日ごろの感じに関心が向くために、日常生活、諸式を大切にようになる。そのために、現実から離れた抽象的な概念についてはあまり気にしなくなる。頭で作り上げる抽象的な道德律は、軽視されてきたのである。その代わり、日本では、人に見られること・人の顔を思い浮かべることで自分を律する「義理人情」が尊重されてきた。

また、利益が得られるならば、どのような神でもよいという傾向も生まれ、そのためにどのような神を祭っているのか分からなくなってしまうということもあった。「延喜式」(927年)の神名帳の時代にすでに神の名が分からなくて、某处在神(いますかみ)と所在地のみを挙げているという²⁰⁾。平安時代以降は、古くからの神名を捨てて、より御利益のある神をまつろうとする者がいた⁴⁾。例えば中世では大国主命を祭る神社が、八幡社や天神社に変わったところがある。柳田によれば、「尾張地名考」には、祭っている神の名がわからなくなり、役人につぶされることを恐れて、徳川家に縁のある八幡宮にすれば安心ということでそう称した神社が多かったと記されているという²¹⁾。

このような現世利益優先の傾向は、ただ利己的な現世利益に留まるだけでなく、家族や地域、国の安泰や繁栄を願うことへも発展する。敏感さゆえに、個々人の生活の中で快や清浄さが得られる社会を作る試みは、具体物から出発するやり方である。抽象的に理想的人間や理想社会を考え出してその実現の

ために努力するやり方とは異なる。

4.5 怨霊思想

柳田によれば、英雄や功績のあった人を神として祭る習慣はなかったという。むしろ、人が神として祭られる場合は、天寿をまっとうしなかった人、不幸にして死んだ人の霊の祟りを恐れている場合が多かった²²⁾。柳田は、戦争で敗れた武士を祭った例を多数挙げている。このような神社は、いつの間にか人から忘れ去られ、朽ちていった。

不幸な形で人が死んだ後で、災害が発生したり、疫病が流行ったりすれば、それらの災害や疫病は、不幸な死と結び付けられ、怨霊のたたりのせいだと考えられた。そして怨霊を鎮めるために神社が作られた。有名な例では、早良親王(崇道天皇)や崇徳天皇(金刀比羅権現)、菅原道真(天満天神、天満神、天神)、平将門などいた。

その他、除霊のためのお祓いも行われてきた。獅子舞もお祓いの一つである。9世紀頃からは、怨霊を鎮めるために、御霊会(ごりょうえ)が行われてきた。

寺の話ではあるが、梅原²³⁾は、法隆寺が、聖徳太子の霊を鎮撫するために建てられたと考えている。

このような怨霊思想は、不幸な死者に対して感じる人が多いことに起因すると考えられる。つまり、不幸な死を遂げた人の霊は、恨みを持ち続けると感じたり、災害が起り疫病が流行れば、怨霊のせいではないかと感じ不安になるのである。そのために、怨霊を崇拝することで慰めようとするようになったと考えられる。

4.6 祖霊崇拜

祖先の霊を崇拜することも、神道の特徴である。祖先の霊を敬う気持ちは、弥生時代からあった⁴⁾。農耕地をつくってくれた祖先の霊の功績を忘れられなかった。先祖のみたまを祀ることで、先祖の霊が自分たちを守ってくれると考えていた。これは、「祖霊信仰(みたま信仰)」と呼ばれている。

もともと人が死んでも、魂は永久にこの国土に留まり、そう遠くに行かないという思想が昔からあった²⁴⁾。しかも、定期的に降臨すると考えられていた²⁰⁾。祖霊の中では始祖が一番大切に、功績の偉大な神で

あった²¹⁾。

自分たちを守ってくれる祖霊を祀る、自分たちの家族を守ってくれるという考えから、一族郎党、地域社会を守ってくれるという氏神信仰や村の鎮守様の信仰が発展してきた。

祖霊信仰があまりにも強いために、もともと魂は浄土に行ってしまうと考えていた仏教も、祖先供養のために葬式や法事を行うようになってきた。江戸時代の檀家制度によって、仏教が葬式や法事を取り仕切ることになった。

遺骨に対する信仰の深さも、日本的な特徴とされている。しかし、縄文時代や弥生時代には、遺骨を大切にするという風習はなく、奈良、平安時代になっても、遺骨信仰は見られていない。

日本人は、霊には関心があっても、遺骸や遺骨には注意を向けなかった。それが、10世紀から11世紀にかけて、天皇や貴族の遺骨を寺院に納めるようになり、それが高野山への納骨に発展し、さらに一般の寺への納骨となったと言われている²⁵⁾。

祖霊崇拜や遺骨信仰についても、敏感さによって説明できると思われる。祖霊崇拜については、恩を受けた祖先をイメージすることで、感謝の気持ちを感じたり、守られていると感じることができたのである。祖先の霊を日常的に感じることから、いつも祖先の霊が身近にいるとか祖先の霊が還ってくるという感じを持つようになった。

残された遺骨についても、何かを感じてしまう感受性が現れてきて、遺骨をしっかりとあるべきところに納めなければ安心できないことになってきたのであろう。

4.7 新しい神を作り出す

日本では、すぐれた人を気軽に神と呼ぶことがある。例えば、松下幸之助のよううまく会社を経営する人を「経営の神様」と呼んだりする。柳田によれば、昔は英傑を祀る社はなかったという。天海僧正の神学によって、東照権現の宮が造営されたのが最初であるという²⁰⁾。

明治以後にはこのような例が多数現れた。これには、明治になって、偉人を顕彰することで国を発展させようとする政治的な配慮がうかがわれる。

尊敬する人物を神として崇めた例を見てみよう。神戸市にある湊川神社は、楠木正成を祀る神社であるが、楠木正成は維新の志士らによって「理想の勤皇家」として崇拝され、明治政府によって神社が建てられた。

間宮林蔵は樺太が島であることを確認した江戸時代後期の冒険家であるが、札幌市にある北海道神宮の末社である開拓神社に、北海道開拓の功労者の一人として祀られている。

日本人は、敏感さゆえに、「感じること」が重要となり、神を意識したときにも、身近に感じるのである。どこかはるかに離れた存在というよりは、自分の近くにいる存在として感じられるのではないかと思われる。しかも、概念的に明確に神を規定しているわけではないから、偉い人を神として感じれば、それでもよいという気持ちになるだろう。何か「素晴らしい」とか「ありがたい」と感じれば、拝む対象になりえるのである。だから偉い人が現れ、神として考えられても、それほど違和感なく受け入れられる。そのために新しく神が増えるにしてもよいのである。

5. 分析の結果

以上、「敏感さ」という観点から、神道の信仰の特徴を説明できるか考えてきたが、ある程度説明可能であった。多神教については、心が敏感なために、現在の身近な状況で多感となるので、異なる神を感じる、と説明できる。アニミズムは自然崇拜と言い換えた方がよいが、敏感であることで、様々なものに生命力や霊性を感じやすいと説明できる。無宗教的態度については、感じることで信仰心を持つので、無意識のうちに信仰心を持つことになり、本人は自分が無宗教と思い込んでしまうと考えられる。現世利益を求める傾向については、現在ない理想郷を求めるよりは、身近な状況で快・清浄さを感じたいという世俗的感情から説明できる。怨霊思想については、不幸な死者の祟りを感じて恐れると説明できる。祖霊崇拜については、先祖をイメージすることで、身近に存在すると感じられると説明できる。新しい神を作り出すことに関しては、神が感じる神であり、新たに神を感じるのであれば、神として受け入れや

すいと説明できる。

以上、敏感さによって現れる行動的特徴には、次の3つにまとめられるだろう。「多感になること」、「多感なために抽象的・概念的思考が軽視されること」「信仰のための努力がそれほど必要でないこと」である。

「多感になること」が、多神教や怨霊思想、祖霊崇拜、新しい神を作り出すことなどに関係している。

「多感なために抽象的・概念的思考が軽視されること」が、アニミズム（自然崇拜）や現世利益を重視する信仰に関係している。

「信仰のための努力がそれほど必要でないこと」が、無宗教的態度と関係している。

以上のように「敏感さ」から神道の特徴を説明できるわけであるが、そのような説明が妥当かどうかについては、これからも検討し続けることが大切と思われる。

6. 考察

6.1 改めて「敏感さ」の起源を考える

日本人は、敏感であるという前提で論を進めてきたが、その「敏感さ」の起源について改めて考えてみたい。

多彩で豊かな自然の風土に原因を求める説が多い。山折によると、「天災は忘れたころにやってくる」という言葉で有名な寺田寅彦は、日本には地震、津波、台風による脅威があり、日本人は防災上のすぐれた知恵を養ってきたが、「その知恵の1つとして自然の驚異の奥行きと神秘の深さに対する鋭い感覚が磨きあげられた」と述べ、その結果、日本人は「自然への随順、風土への適応」を行うようになったという。「荒涼たる砂漠に一神教が生まれたのにたいし、多彩にして変幻きわまりない自然をもつ日本に八百万の神々が生まれ崇拝されつづけてきたゆえんであります」という²⁵⁾。つまり、風土によって、日本的感受性が育まれ、かつ多彩に変化する風土のせいで自然崇拜の多神教が生まれたという考え方である。

久保田も、日本の「宇宙創世の神話は、だから、この地に特有の自然風土という条件を抜きに読み解くことはできない」¹⁷⁾と述べている。

ただ、風土だけでは説明できないのではないかと思われる。もし、他の民族が日本に移り住んだとして

も、日本人のように敏感になるのではなく、別の宗教心が発生したのではないかと考える。日本人が持つ生来の生物学的な特質があって、日本の風土と関わり合うことで、特有の宗教心が生まれてきたのである。

なぜなら、砂漠の民も始めは多神教であったし、逆に、キリスト教やイスラム教が世界に広まった結果、様々な自然環境に住んでいる人も一神教を信仰しているからである。

日本人も、仏教を取り入れたが、その仏教は日本的なものに変化してきたし、仏教が導入されても、神道は生き続けているのである。また、同じ風土に育っても感受性や性格が異なる人は多い。風土だけで、敏感さを説明することは困難である。

6.2 恵みがなくても信じる一神教

神道的信仰を明らかにするために、少し一神教についても考えてみよう。一神教の成り立ちを考えると、かなり理屈で考えるという面があるように思われる。加藤²⁶⁾の説を紹介しよう。ユダヤ人の奴隷状態からの解放が、モーゼの指導の基に行われた。前13世紀の出エジプトである。この経験が、神（ヤーヴェ）が助けてくれたという意識を生み出す。ソロモン王による栄華を経験した後、北王国南王国が滅び、バビロン捕囚が起こる。他民族に国を滅ぼされ、奴隷にされたのだ。

普通であれば、神は助けてくれなかったのだから、神を見限ってもいいはずである。しかし、ユダヤ人は、自分たちが神をしっかりと崇拜しなかったから神が沈黙したと考えた。その結果、ヤーヴェのみを固く信じるという一神教の土台が築かれたという。以上が加藤²⁶⁾の考えである。

現実には神は何もしてくれないのに、神への信仰が強固になったということは、現実的な感覚から生まれた考えと言うよりは、論理的思考によって、導き出された考え方であることを示しているだろう。

現実では神の恵みが感じられないので、論理的に考えざるを得なかったとも考えられる。現実の欠陥を論理によって補おうとしているわけである。

6.3 不合理だからこそ信じる一神教

しかし、その論理によっても解決しない問題がある

場合にはどうしたらよいか。意志の力で無理やり信じるしかない。自然の状態では、神の恵みを感じられない場合は、意志の力で神の恵みを信じるしかない。

キリスト教に内在する合理的思考では説明できない部分は、意志によって信じてしまうのである。処女のマリアがキリストを産んだ話や、死んだはずのキリストが三日後に復活するといった話は、もちろん理性的には理解ができない問題である。だからこそ、「信じる」という行為が生まれるのである。

アフリカ教会のテルトウリアヌスは、「不合理なるが故に我信ず」と述べた¹⁵⁾が、理屈に合わないことは、信じるしかないのである。

このような論理的整合性を求めながらも、論理的説明が不可能な部分は「信じる」という意志の力を発揮するのは、風土のせいと言うよりは、ユダヤ民族の思考傾向を示している。

6.4 一神教は必然か？

Astonは、多神教から一神教に至る道筋を3つあると言う。一つが、一つの神を選んで、それに他の神を従わせる道筋、二つが、宇宙を超越する存在を神格化する道筋、三つが、外国から来た神を崇拝して、在来の神への崇拝を止めてしまう道筋である²⁾。あたかも宗教が発達していくと、一神教へと発展していくのが当然という考えである。

しかし、どの民族も一神教へと変化することが必然であろうかと言うと、そうとは思われぬ。自然と民族の特異性によって一神教が生まれたのであって、どの民族にもどの地域でも、信仰が一神教へと“高められる”と決めることはできない。

また、一神教は最高の宗教とは思われぬ。一神教では、抽象的にそして無理に唯一の神を信じるために、他の考え方や他の宗教とは妥協できにくい精神性が助長される。そのために、信仰のための争いが絶えないという面が表れている。保坂は、キリスト教が生まれたころ、ローマの他民族支配は宗教に対して寛容であったのに、その寛容な扱いに対しても、キリスト教徒のみは妥協を拒み続けた、と述べている¹⁵⁾。信じるからこそ妥協できないのである。

これは、論理的思考と意志の強さのために、妥協できない心ができてしまったからである。一方、神

道では、感じることで、神や自然を崇拜してきたために、周りの状況が変われば感じ方も変わり、原則に拘らない面が現れてきた。

感じることで多くの神を生みだしてきた日本では、難しい理屈を考えてこなかったと言える。そのために、仏教もキリスト教も、たくさんいる神にさらに別な神が現れただけと考えることができたのだと言える。論理的に考える原則がないと言えるが、感じを尊重するという原則はあるのであり、柔軟であるとも考えられる。論理的非寛容による争いは起こらないのである。もっとも日本でも、国家神道という一神教が国民を支配した時には、非寛容になってしまったという苦い経験を持っている。

6.5 宗教の世俗化

科学が発達するにつれて、宗教を聖なるものとして信仰する人は減ってきている。これを宗教の世俗化と呼ぶ²⁷⁾が、日本では、もともと意図的に信仰しなければならぬという意志の力は弱かったので、世俗化という尺度で見れば、進んでいる。しかし、世俗化といっても感じる信仰心は持っているのである。世界のつながりが深まる現代、他民族の考えを柔軟に受け入れることが必要であり、そのために宗教の世俗化も必要と思われる。このように考えると無宗教的日本的信仰形態は、宗教のこれからの進むべき道を示しているのかもしれない。

7. 文献

- 1) 佐伯彰一 神道のこころ 見えざる神を求めて 中央公論社 1992: 31.
- 2) Aston, W.C. Shinto: The Way of the Gods, Longmans Green and Co. London, 1905. 安田一郎訳, 神道, 青土社, 1991. p.71, p.73, p.72, p.27, p.140, p.139, p.211, p.220, p.72.
- 3) 平野仁啓 日本の神々—古代人の精神世界— 講談社. 1982: 218.
- 4) 武光誠 日本人なら知っておきたい神道 河出書房新社 2003. p.20.
- 5) 阿満利磨 日本人はなぜ無宗教なのか 筑摩書房 1996. p.11.
- 6) 梶村昇 日本人の信仰心 中央公論社. 1988.vi.
- 7) 南博 日本人論：明治から今日にいたるまで. 岩波

- 書店, 1994.
- 8) 安藤則夫 日本の心理特徴から生まれた日本語の構造：日本の心性が日本語に与える影響について 植草学園大学研究紀要第2巻, p.45-58.2010.
- 9) 三橋健 神道の常識がわかる小事典 PHP研究所 2007.
- 10) 津田左右吉 日本上代史の研究 岩波書店 1947. p.417.
- 11) 筑紫申真 アマテラスの誕生 講談社, 2002.
- 12) 上山春平 神々の体系. 深層文化の試掘, 中央公論社, 1972.
- 13) 松前健 日本の神々 中央公論社, 1974.
- 14) 安田一郎 訳者あとがき In Aston, W.C. Shinto: The Way of the Gods, Longmans Green and Co. London, 1905. 安田一郎訳, 神道, 青土社, 1991.p.367.
- 15) 保坂幸博 日本の自然崇拜, 西洋のアニミズム2003, 新評論, 東京. p.8, p.79.
- 16) 山折哲雄 信ずる宗教感ずる宗教 中央公論社, 2008. p.66.
- 17) 久保田展弘 日本多神教の風土 PHP研究所, 1997.
- 18) 山梨県立図書館 (2110005) の調査より。「古来, 西行の歌か否か真偽のほどが問われていた歌であるが, 1674 (延宝2) 年板本系統の『西行上人集』に収録されている。」
- 19) 一覧で見る日本全国の金運神社 (オンライン) < <http://fusuihoui.jp/kinunjinjya2.html> >
- 20) 柳田國男 神道私見 柳田國男全集13 筑摩書房 1990.p.598, p.621, p.623.
- 21) 柳田國男 神道と民俗学 柳田國男全集13 筑摩書房 1990.p.522, p.530.
- 22) 柳田國男 人を神に祀る風習 柳田國男全集13 筑摩書房 1990. p.656
- 23) 梅原猛 隠された十字架 法隆寺論 新潮社 1972.
- 24) 柳田國男 先祖の話 柳田國男全集13 筑摩書房 1990. p.61.
- 25) 山折哲雄 日本人の宗教感覚 日本放送出版協会, 1997, 東京. p.50, p.115-119. 2
- 26) 加藤隆 一神教の誕生, ユダヤ教からキリスト教へ 講談社 2002.
- 27) Hammond, P.H. Introduction. In P.E. Hammond (ed.), The sacred in a secular age. University of California Press, 1985. USA.